

遣弘一七師団 独歩二〇五大隊
河南省杞県 第四中隊に配属

昭和二十年四月 第三次河南作戦に
参加

昭和二十年八月七日入満 敗戦は南
新京 武装解除は公主嶺

昭和二十年九月二十日 満州里經由
入ソ チェレンホーボ第八收容所

昭和二十一年七月 北朝鮮古茂山収
容所へ移動

昭和二十一年二月二十三日 興南港
より太瑞丸（第四番船）にて佐世保

に上陸 復員

復員後の役職 農事組合長、区長、土地改良、
構造改善事業の役員、神社総代、

香取神宮崇敬会地区委員等歴任、
現在は菩提寺の総代

（千葉県 兼平 正二）

シベリア抑留体験記

福井県 田 畑 寛 意

昭和二十（一九四五）年八月二十六日、満州国
奉天省熊岳城にて武装解除。

昭和二十年十月八日、大連か旅順かウラジオオス
トックから日本へ送還してやると貨車に乗せられ
北へ北へ満州里を経由してチタ州西方二十キロ炭
坑の町チエルノフスカヤ駅到着、第四收容所に収
容された。

收容所は半地下式で、宿舍の両側に入口があり、
中央を通路にして両側が二段ベッドになっている。
收容所の周囲は三重の鉄条網で囲まれ、ソ連兵が
自動小銃を持って監視している。收容所入所時、
ソ連兵の身体検査があり、時計のネジのかけ方も
知らない兵が腕時計や万年筆が珍しくて取り上げ、
ソ連はうそつき、泥棒のようである。

知能が低い、無理もないソ連兵や労働者は掛け

算割り算ができず、四年程度の学歴と聞きます。

さて入ソ初年度の冬は四十年來の寒気とか、寒さが厳しく、食事がこうりゃん、粟、とうもろこし、小麦粉の雑炊とスープで、重労働と寒さと飢えのため、栄養失調となり、毎日一人二人と死んでいく。生き地獄である。

冬は地面が凍っているので遺体を近くの丘の上に仮安置しておき、春、雪解けを待つて埋葬する。異郷の地で命を落し気の毒至極である。

私は衛生兵であつたため、免れて医務室勤務となり、職務上ロシア語、医療用単語を学び、読み書き会話ができるようになって診断の助手、入室患者の看護、ソ連病院派遣など勤めた。診察に印刷したカルテがなく、わら半紙に鉛筆があてがわれるだけで、白紙に横線を引くのが上手になった。

医務室は日本の軍医が二人、ソ連の軍医が二人で、風邪の患者にガラス容器の吸い口をかけたたり。身体検査は尻の筋肉をつまんで弾力性によりオカ（栄養失調）かどうかを判定し、病弱者は休養室

に入れて作業を休ませ、血粉の錠剤を与える。野蜜のようなやり方である。入室患者には白パン、米粥を与え介護は良好であつた。

初年度食事が悪かつたのは、ソ連が食糧を横流ししたからだとか。ソ連のうそつきとごまかしにはあきれる。二年度からは寒さに慣れたせいもあるが、黒パン支給となり栄養失調が減少した。

さて、入ソして洗濯をした記憶がない。虱が沸くのは当然である。衣服の上をゾロゾロ歩いていく。虱の駆除が月一回あり。当日一晩だけは安眠できる。入浴は月二、三回で手桶二杯の湯で体を洗う。このように想像もできないような最悪の環境、最低の生活をよくもしいできたと思う。ハラシヨラボーター、ソ連軍医に認められて病弱者に次ぐ早いダモイ（帰還）、感無量である。

昭和二十三年五月二十六日、ナホトカ港出帆、大郁丸。五月二十九日、舞鶴港上陸。昭和十五年三月から満州、比島、北支、中支、豪彊を転戦し、ソ連抑留二年九か月を含めて八年三か月ぶりで踏

む内地の土である。

また、舞鶴援護局での食事、大浴場での入浴は、生き長らえて帰還した喜びをかみしめた。

さて、当第四收容所の主なる作業は、炭鉱夫で、寒さには恵まれたがノルマがあつて重労働であつた。

終戦時満州在住の部隊は、ソ連に抑留強制労働をさせられた。この報酬は、舞鶴援護局から千円、後ほど県援護課から三千元（一年千円当たり）の支給があつたが、戦後貨幣価値なく、わずかであつた。犠牲となつた戦友の冥福を祈り、シベリア抑留の体験記とする。

【執筆者の紹介】

本籍地 福井県今立郡服間村柳
現住所 福井県越前市岩本町
生年月日 大正八年三月十日
入隊年月 昭和十五年三月四日（昭和十四年徴

集）

入隊地	満州国牡丹江省牡丹江海浪
入隊部隊	第八航空教育隊現地入営
軍歴	第十八飛行場大隊配属
階級	衛生軍曹
武装解除	満州国奉天省熊岳城に於て昭和二十年八月二十六日
入ソ	昭和二十年十一月二日（抑留二年九カ月）
收容所	ソ連チタ州チエルノフスカヤ第四收容所
復員	昭和二十三年五月二十九日 大郁丸舞鶴港上陸（軍歴八年三カ月）
職業	今立町農業協同組合 株式会社新珠食品

（福井県 佐々木 清左夫）